

服部英次郎

ニーコラーウス・クサーヌスは中世と近世との境界に立つて、其の雙の面を新舊の兩時代に向けるヤヌス的思想と言はれる^{*}。其は、彼の出生が

出され、認識の問題は其の體系の要石とせられる^{**}。

ルネーサーンスの世紀であるカトロチエントの最初の年に當つて居るからではない。彼の哲學が古

* W. Windelband, *Geschichte der neueren Philosophie*, Bd. I, 7 n. 8 Aufl. 1922 S. 46.
** E. Varslebenbergh, *Le cardinal Nicolas de Cues*, 1920. P. 279.

き思想と新しき精神との融合であり、兩時代の諸傾向の統一であるからである。其の故に、彼の哲學には、或る意味に於て中世哲學の最後の體系が又他の意味に於て近世哲學の最初の體系が認められる。全中世を動かして居たと同一の問題が尙ほ彼にも現れて居る。彼が解決に力を盡したのは神の世界に對する關係の問題である。併し其はやがて全然新な問題の提出に導く。「自然と人間とは見

併し此の如きことは容易に成し遂げられたのではない。古き權威の崩壊と新しき世界への轉向の時代に於ては、ひとは傳統を固執しながら、其を破つて生れ出る新しきものを抑壓し得ず、又意識的に新しきものに向ひながら傳統の拘束を免れない。スコラ哲學と神祕説とに育まれ、教會に樞要の地位を占め、教理の忠實な遵奉者でありながら量と數とを高調する近世の數學的自然科學の精神

は明かに現れて居る。何等の權威にも基かず、「學者の書ではなくして、神の指によつて書かれ、到る處に存する書を讀め」と言ひながら、教理は少くとも其の研究の目標を指示する。彼の哲學が直接的に新しきものに向はずに、傳統的なるものに於て變化と發展とを経験して、始めて新しき考へ方と問題の提出とに到達したことは、其の歴史的地位から見て當然のことである。中世を貫く神祕主義の系統の後裔として、彼の由來を尋ねるとき、

プンイドー・デイーオーニューシウス、スコートゥス・エリッゲーナ、エックハルト等が見出される、そして其の背後にはアウグステイヌス、プローティエーノスの姿が認められる。併し他方、近世哲學の先驅として、彼によつて開かれた行程を辿るとき、先づブルーノ、そして彼を通じて或る方向に於てはライブニツ、他の方向に於てはスピノーザ、更に或る意味に於てはシェリンクとヘーゲル

とが見出される。實際近世哲學は、ニーコラーウス・クサーヌスの思辨にとつて終極をなす思想を出發點として、其を多様な方面に展開することによつて始まるのである。如上の意味に於て「總てのものは彼に於て古く、而かも古きものは新しきものとせられて居る」と言ふことが出來よう。

* K. Jaeken, N. v. C. als Bahnbrecher neuer Ideen, Beiträge zur Einführung in die Geschichte der Philosophie, 1906 S. 9

學問の歴史は必しも新思想の創始者に公正ではない。ピオニールは彼に續くマイステルの背後に退きがちである。ルネーサンスの先頭に立つ我が思想家も、後世の記憶に於ては、主要問題に於いて彼の弟子である後繼者の名聲によつて光を失つて居る。實際、我々はジョルダノ・ブルーノに就いて語ることがあまりに多く、ニコラーウス・クサーヌスに就いて語ることがあまりに少い。此は或る意味に於て正當であり、他の意味に

於て不當である。併し今は此の如きことを論議すべき時ではない。たゞ久しく要望された彼の完全な全集がハイデルベルクのアカデミーによつて用意されつつあることを記すに止めよう。^{**}そして彼の時代に酷似せる諸相を示す時代に生活する我々は、彼から學ぶ所があらう。

* P. Barth, Zum Gedächtnis des N. C. Vieljahrsschrift für wissenschaftliche Philosophie u. Soziologie. XV. 1901 S. 483

^{**}併し彼に關する文献は決して僅少ではない。そして其に大體三種を區別することが出来る。(一)神學的、哲學的關心によるもの、(二)純哲學的研究、(三)彼に現れた數學的自然科學の精神を認識問題を重視することによつて、近世哲學の創始者としての彼の地位を確立しようとする試み。そして其がコーヘンの學派に起つたのは當然である。コーヘンは如上の側面に屢々言及して居る。カッシーレルは彼の大著「認識問題」の筆をニーコラーウス・クサーヌスに起して居る。彼等の最近の努力は、E. Cassirer, Individuum u. Kosmos in der Philosophie der Renaissance 1927 及び J. Ritter, Docta Ignorantia. Die Theorie des Nichtwissens bei N. C. 1927 等に見られる。

^{**}彼の全集は一五一年パリ刊行と一五六五年バーゼル刊行

ニーコラーウス・クサーヌス

その二種あるのみ。併し二三の著作の別冊版は現れて居る。弘く行はれるのは(Windelband, Lehrbuch der Geschichte der Philosophie. 9 u. 10 Aufl. 1921 S. 268参照)「マンネプ(F. A. Schaffp)の「獨譯主要著作集」(N. v. C., Wichtigste Schriften in deutscher Übersetzung 1862)である。併し此の譯書は多くの恣意的な省略と少からざる誤譯のため甚だ不完全である。

(一)

ニーコラーウス・クサーヌス^{*}は一四〇一年、モゼル河畔の、トリールから程遠からぬ小邑クエスに、^{**}貧しい舟夫の子として生れた。既に幼少の頃から彼の中に萌して居たより高き、精神的な生活に對する憧憬は、郷に止つて家業を繼ぐことを許さなかつた。幸にも彼はウルリツヒ・フォン・マインデルシャイトといふグラーフに非凡の才を認められて、ニーデルラントなるデーヴェンテルの教團に送られ、其處で少年時代の教育を受けることを得た。此の教團は前にトーマス・ア・ケンピス、後に多くの人文主義者達が生れ出た所である。長

じて彼は諸地の大學に學んだ。一四一六年、彼の名はハイデルベルク大學の名簿に見出される。其の教授達から彼はオツカム流の唯名論の影響を受けたらしい。併し其よりも彼の發展に決定的であつたことには、一四一八年彼は人文主義的教養の源泉伊太利に赴き、パードウアの大學に入つた。

此の大學は、當時獨逸の諸大學が依然スコラ哲學の束縛の下に屏息して居たのに反して近代的人文主義的精神の養育所として有名であつた。彼の專攻は法學であつたが、數學、物理學、神學等をも修め、「其の時代の全知識に通曉する」基礎は置かれた。そして我々は此に、彼の後年の發展に全く異なる方面に於て決定的な影響を與へた二人の名を挙げなければならない。羅馬法王の使節ユーリアーン・チエザリニと自然科學者バオロ・トスカネリ。彼の教會に於ける活動は全然前者の勤誘と庇護との下に行はれた。又彼の自然科學方面に於け

る研究は主として後者の奨勵と共學との下になされた。一四二四年、彼は僅かに二十三歳の若年を以て法學士 (doctor decretorum) の稱號を得た。同國人を遙かに凌駕した多方面の教養を得て彼は獨逸に歸つた。彼は伊太利に於て榮えて居た科學的教養を修得して、其を祖國に移植した最初の人と言はれる。

* 本來は Nicolaus Chryplis, Chryplis は Krebs の方言。

** 其故に、Nicolaus Cusanus 或は Nicolaus von Kues と呼ばれる。併し、N. von Cusa は無意味である。Eucken, op. cit. S. 2 參照。

歸國後、彼はマインツに辯護士として定住した併し法律家としての經歷は甚だ短かつた。最初の訴訟に手續の不備のために敗訴した若き學士は、甚だしく嫌厭を感じて彼の職業を續けることを斷念した。彼は、其の當時に於ては最高の榮譽が存すると考へられた經歷に向つた。一四二八年、彼は僧職に就いたのである。ひとは、彼も亦名譽感

の旺盛なルネーサーンス人であり、そして教會と僧職とは、當時に於ては、世俗的活動の舞台と手段とであつたことを想起すべきである。彼は豊かな教養と力強い説教とによつて間もなく顯職に累進した。一四三一年、教會の根本的改革を遂行せんとするバーゼルの宗教會議（一四三二—一四九年）が開かれた。法王オイゲン四世から會議の主宰と管理とを委任されて居た舊師ユーリアン・チエザリニに招かれて、彼は其に參加した。彼は大規模の改革案を起草して、其を「カトリック的統一」(De concordantia catholica. 1433/34) とする書に書き下した。既に此の最初の著作に於て、彼の、陰鬱な中世的思想から脱した明澄、純粹な近代的精神と、總ての外的敬虔を斥け内心的敬虔を重むる態度とが現れて居る。此の如き精神から、彼は法王宮廷に漲る利慾、僧職階級を支配する不徳と無教養とを痛烈に非難した。彼は法王に對して宗

教會會議の權力を辯護し、其によつて有効な改革事業を遂行し、教會の普遍的統一を成就しようとした。又此の會議に際して有名な「曆の修正」(De reparatione calendarii. 1436) の著されたことが記されるべきである。併しやがて宗教會議の内部に分裂が始まつた。そして其は其の權威を失墜せしめ、其の改革事業を防げた。彼は最初は宗教會議の力強い擁護者であつたが、今や其の總ての有効な事業を不可能にする分裂を眼前に見て、突然法王黨に移つた。(一四三七年)ひとは此の如き變節とも言ふべき行爲を理解するに苦しむであらう。併し、其には或る利己的な動機が存して居たとは考へられない。恐らく、彼の中に存して居た全西歐教會の統一の、進んでは羅馬教會と希臘教會との融合の理想が、其を實現し得ると考へられた法王黨に彼を驅つたのであらう。彼はユーリアン・チエザリニによつて法王に堆薦され、やがて羅馬

教會と希臘教會との協調といふ使命を帯びてコンスタンティノーベルに派遣された。彼の同地滞留（一四三七—二八年）に就いては、我々は遺憾ながら知る所が少い。併し此に記されるべきは、彼の希臘文書の探究と多くの回教徒との交渉である。歸國後も彼は依然多忙な教會的活動を續けねばならなかつた。續行されて居たバーベルの宗教會議の長老達はオイゲン四世を廢しよう企てた。アマデーウス・フォン・ザーヴオイエンが反立法王に選ばれた。彼は法王の使節として、オイゲンの危き地位を救はんがために、マインツ、ニュルンベルク、フランクフルト等の議會を訪れた。實際彼は、後の法王エネア・シルヴィオ・ピッコロミニの書簡に見える如く、「オイゲン黨のヘルクルース」であつた。そして「深き教養と經驗とを有する彼が優れた才能に恵まれながら、此の如き鬭争渦中に陥つたことは悲しむべきことである。」

やがて、クサーヌスの友トーマス・サルツァノールがニコラーウス五世として法王に選ばれた。既にオイゲンによつて企てられて居た彼の昇進は實現され、クサーヌスは「繫縛のペテロ」(Petrus in vinculis)といふ稱號を以て主教カルディナルに進んだ（一四四八年）其は同時代の歴史家の言に従へば、獨逸人にとつては「白き鳥よりも稀な」榮譽であつた二年後には、彼はテューロールのブリクゼンの司ビシ教に任命された。（一四五〇年）彼の教會改革運動は始まつた。彼も亦後にルツテルがさうであるやうに外的な儀禮にはなくして、内的心情と其から發する行爲とに眞の信仰の基礎を置いた。何等の教會の儀容もなしに、たゞ銀の十字架を彼の顯職のしるしとして、彼は獨逸及びニーデルラントに旅行した。此の改革運動の旅は、言はゞ凱旋行列であり今や彼は權力の頂上に立つて居た。併し彼が監督管區に歸つたときには、暗雲が彼の前

途に垂れこめて居た。彼は此に一人の力強い反對者に逢つた。彼は帝權の法權への隸屬といふ主張の下にテイローロールのジギスムント公から君臣の誓を要求した。併し大公は司教を官中牧師として待遇するに慣れて居た。衝突は免れなかつた。其はクサーヌスの晩年を辛からしめたあの涯しなき不愉快な鬭争に導いた。此の長年の争ひのために彼は管區を遠く離れて伊太利に住まねばならなかつた。

兎角する中に彼の舊友エネア・シルヴィオ・ピッコミニがピーウス二世として法王の位に即いた。彼の主要努力は、勿論深い宗教的動機からでなかつただらうが、全歐の諸權力の援助を得て、新に十字軍を起すことにあつた。そしてピーウスが其を計畫して居る間にクサーヌスは或る十字軍、勿論精神的な十字軍を企て、居た。彼は前述のコンスタンティノーベル滯留時代の研究に基いてコー

ランを批評した。(De vibratione Alchoran. 1461) 又「信仰の平和 (De pace seu concordantia fidei. 1461) なる書に於て彼は總てのドクマを除去した純粹の内心的信仰を樹立し總ての國民を、西歐人もユダヤ人もトルコ人もも包容する宗教に到達しよう」と試みた。^{*}

^{*} 此の如き理性宗教とも言ふべき普遍的宗教の樹立の試みに就いて注意すべきことは、クサーヌスが其を現實宗教の彼方にてはなくして正しく理解された基督教其のものの中に求めたことである。Ludhen, op. cit. S. 19 参照

當時の基督教界の二大中心人物ピーウスとクサーヌスとによつて、教會の一般的改革の計畫が進められて居たらしい。若し此の計畫が實現されたなら、そして其はしか容易くは實現されなかつたであらうが、近世の歴史は恐らく他の経過をとつたであらう。何となればレフォルマティオンの機縁となつた教會の不法は疾づくに除去されて居たであらうから。併し一四六四年八月十一日、彼

はウムブリエンのトデイなる流滴地で逝いた。四日後にピーウスも亦彼の後を追つた。其精神が自らの時代を遙かに超越した二人の先驅者は時代の歩みのあまりに緩いのに堪へ難くして遂に時其のものを離れて彼等の進路を急いだらしい。クサーヌスは羅馬のセント・ペテロ・イン・キンクリースに葬られた。そして彼の心臓は彼の郷里クエスに建てられ、彼の隣人愛の表徴といはれる救濟院の教會の土質窖に收められた。

(二)

ニーコラーウス・クサーヌスの哲學説を、殊に其の異なる諸相を教科書的敘述の型式に強ひることなしに、彼の著作的活動の時期を區別しつつ、彼の内的歴史の發展を跡付けようとするとき、考察は先づ彼の一四四〇年の著作「無知の知に就いて」(De docta ignorantia)*を「假定に就いて」(De con-jecturis)とから出發しなければならぬ。兩書は

同年に完結し、同一人、彼の友にして庇護者なる主教ユーリアーン・チェザリニに捧げられて居る其は、彼の哲學の最初の、勿論確定的でないが、完結した體系、即ち「無知の知」の體系^{***}を與へる。

* 此の書に就つては、N. C. Della Dotta Ignoranza. Testo Latino con note di P. Rotta. (Classici della filosofia moderna, XIX) 1913 に據り、「一種の獨譯(即ち N. C. Vom Wissen des Nichtwissens, Übersetzung u. Nachwort von A. Schmidt. 1919)と前掲ミヤルプフの「獨譯主要著作集」を参照した。

** (docta ignorantia) は、字義通りには「學識ある無知」(das gelehrte Nichtwissen)を譯されるべきであらう。併し今は假に在來の稱呼に従つて「無知の知」(die Wissenschaft des Nichtwissens)を譯して置く。

ニーコラーウス・クサーヌスの問題は、アウグスティーンヌスの表現によれば、「神と世界との認識」であつた。併し、其は、彼にとつて長年解き難い謎であつた。満足すべき解決を彼は先人にも又彼自らにも見出すことが出来なかつた。而るに偶々希臘からの歸途航海中に、其は一四三八年の

初であつたらう、彼は或る新たな根本思想に到達した。即ち、神の靈感によると彼は信じるが、不朽の眞理に就いての人間の知識を超越することによつて、我々にとつて不可解なものを不可解的に「無知の知」に於て理解しようと企てるに至つた。

(De docta ignor. Peratio)

「無知の知」なる概念は勿論ニコラーウス・クサーヌスに始まるものではない。ユービンゲル^{*}はその歴史的発展を(一)基督教的古代に於てはアウグステイヌス、ブンイドー・デイオーオーニエーシウス、(二)中世に於てはボナヴェントウラ其他の神祕家に求めて居る。そしてクサーヌスが其を、彼の敬愛するアウグステイヌス^{**}から得たことは彼自らが如何言はうと、殆ど確かである。尤も彼等は皆、神の認識に關する限に於てのみ「無知の知」を語つた^{***}。併し彼は此に止らずに、遙かに広い範圍に互つて其を語つた。

* J. Unger, Der Begriff docta ignorantia in seiner geschichtlichen Entwicklung, Archiv für Geschichte der Philosophie, Bd. VIII, 1895

** 彼は、「ローマ人への書」第八章第二十六節のパウロの言を解釋するに際して言ふ「我々は我々が求めるものが存在することを知る、併し其が如何なるものであるかは知らない。其故我々には、言はば或るドクマ・イアノランテアが存する。併し其は我々の弱きを助け給ふ神の御靈によつて教へられたのである。(Est ergo in nobis quaedam, ut dicam, docta ignorantia, sed docta spiritu dei, qui adiuvat infirmitatem nostram.) Augustini Epist. ad Probam, (Migne, P. L. XXXIII. Ep. 130), c. 15828.

*** 其は彼等に於ては總ての理性的認識を超越する否除外する最高の窮極の神の捕捉であつた。其は最高の學識と無知の意識との深厚な結合であつた。

「無知の知に就いて」三卷は總ての人間の研究の對象を包含する。我々は絶對的の最大者、神をたゞ不可解的にのみ理解することが出来る。何となれば其は事物の性質を有せず、我々によつて理解される總てのものを超越するから。其は一言で言へば無限的眞理である。無限者と有限者との間には何等の關係が存しない。即ち絶對的の最大者は我々が

其を理解し得るにはあまりに大である。(U. 1. 1. cap.)次に總ての有限的存在者は其の存在を絶對者に負うて居る。後者は前者の原因であり、根據である。而るに絶對者の認識が不可能である限、其に依存する有限的存在者、そして其の全體である具體的の最大者、世界も亦不可認識的である。其故我々には此に於ても亦、我々の理解を超えて或る無知に於て學識あることが相應はしいであらう。(II. Practico)又成程、我々は確かに創造主と被造物との間には、或る因果關係が存するのを知つて居る、併し其を完全理解することは出来ない。(II. 2)我々は此の關係を包含と展開 (complicatio et explicatio)と考へても、又もや此の過程を完全に洞見することの出来ないのを告白しなければならぬ。(II. 3)最後に「絶對的且具體的の最大者」、基督が論せられる。其は被造物である神として、創造主である被造物として考へられる。併し、此

の如きことは勿論我々の有限的悟性の及ぶ所ではない。(III. Practico) 如上によれば「知」は言はゞ「無知」である。(scire est ignorare. I. 1.) 知識は、或る不確かなものを或る假定された確かなものと比較することによつて起る。其は或る關係による比較である。其の故に、無限者は無限者として總ての關係を脱するが故に、不可知的である。又物體的對象の正確な比較、知られたものと知れないものとの完全な一致其は人間悟性の到達し得ないものである。其の故に、古の聖賢達が言つたやうに、我々は知らないといふこと以外には何も知らない、總ての事物は困難で、言語を以て説明されない、眞理は生きとし生けるものゝ眼に隠されて居るのである。しかのみならず、自然に最も明かに存する事物さへ、太陽を見ようとする蝙蝠のやうに我々を手こづらせる。併し認識の欲求は徒に我々に存するのではな

いから、我々は知らないといふことを知らうと欲する。(Desideramus scire nos ignorare.)若し此を完全に成就するなら、我々は「無知の知」に到達する。そして人間は、如何に知識を求めても、彼自らの無知を最もよく知るとき程、完全な知識に到達することは出来ない。そして、ひとは自らの無知をよく知れば知る程、益々多くの知識を得るであらう。(I. 1.)

併し正確な真理が理解されることの出来ないのは、窮極に於て次の如きことによるのである。即ち其は、より多くもより少くもない或る不可分的統一であるからである。真理は、其自ら真理でない何物によつても正確に理解されることは出来ない。例へば、其本質が不可分的統一に存する圓が、圓でない圖形によつて理解されないやうに*。

其故真理でない我々の理性は、真理を、其が無限により正確に理解されることの出来ない程正確に

は決して理解することは出来ない。我々の理性の真理に對する關係は、多角形の圓に對するが如き關係である。多角形は、多くの角を有すれば有する程、益々圓に近似する。併し假令、角を無限に多くしても、其が圓と同一化するのでなければ、圓に等しくはならない。其故に我々は明かに、真理に就いてはたゞ其があるが如く正確には理解することが出来ないといふことを知るのみである。

真理は、其があるよりは多く或は少くあることの出来ない必然性である、我々の理性は可能性である。事物の本質、存在者の真理は、其の純粹性に於ては、到達することが出来ない。總ての哲學者は其を探究しようとして試みたが、何人も其がある如くには見出さなかつた。併し我々は、此の無知に就いてよく知れば知る程益々真理そのものに近くであらう。(I. 3.)

* 此に我々は、希臘哲學以來傳統的な「等しきものは等しきものによつて知られる」といふ思想を見る、こが出来る。(未完)